

## 紀要礼賛

野村俊明

Toshiaki Momura

今年度で本学を定年退職するにあたり、基礎科学紀要の編集に携わってきた立場から想いを述べておきたい。

私の手元にある大辞泉（小学館）によれば、紀要とは「大学や研究所で出す、研究論文や調査報告書などを載せた定期刊行物」とされている。大多数の大学や研究所では紀要を発刊していると思われる。特に文科系大学・学部では紀要は大きな役割をもっている。原稿の枚数制限が比較的緩く、自由なテーマで書ける紀要は若手や中堅はもちろん年輩になった研究者にとっても新しいテーマに取り組み、それを言葉にするための重要な舞台である。何年かかけて紀要に発表した複数の論文を編集して単行本にすることは人文系ではよくある仕事のスタイルである。

私は精神医学の中でも心理学的精神医学ないし社会精神医学を専門にしてきたので研究の仕方は文科系のそれに近かった。また、自分の研究成果を少しでも実地の臨床や実務に反映してもらうことを目標にしてきたので、研究成果を学術雑誌に投稿するより単行本として出版することに注力してきた。結果的に基礎科学紀要に第一執筆者になって投稿することはなかったが、こういうスタイルの研究者にとっては紀要の重要性は今も変わらない。

私と紀要の出会いは、医学部入学前に所属していた大学院（教育学研究科）時代のことだった。私が書いた文章が初めて活字になったのが、東京大学教育学部教育相談室紀要第3集（1980）である。以下、この紀要論文を書いた当時を振り返りながら、私が紀要に寄せる気持ちを書きたいと思う。まったく個人的な回顧的文章になり恐縮だが、エッセイとしてお読みいただければ嬉しい限りである。

(2)

私は高校生の頃、人生の意味に懐疑的になり、怠学とプチ非行をしたのち哲学を志望して文学部に進学した。大学生になってしまうと人生の意味への問いは色褪せ、気楽な学生生活を過ごしたが、他に何を専攻してよいか分からなかったのもそのまま哲学に進んだ。哲学科での卒業論文の題目は「哲学と科学に関する一考察」だった。私が関心をもって読んだ実存哲学者カール・ヤスパースの科学論を土台に、科学には「全体を対象とできない」「意味を問題にできない」などの制約があることを述べたものだった。逆に言えば、科学は対象を限定し、その範囲で妥当性を追求する。ヤスパースは若い時代、法学や医学を学び、それから哲学に転じたこともあってか、科学と哲学がいかにして役割を分担するかという問題関心があったのだと思う。これはカントが、純粋理性批判をはじめとする著作で人間の認識能力を批判的に吟味しつつ、いかにして信仰に場を提供するかを常に考えていたのと共通の問題意識であろう。

私は卒業論文で哲学と科学の関係を取り上げた。ヤスパースの浩瀚な主要著作「哲学」全三巻の第一巻が「哲学的世界定位」であり、いわば哲学的認識論をあたる。実を言えば私は第一巻しか勉強できなかったのも、そのテーマを扱うしかなかったのが正直なところである。そう真面目でも優秀でもなかったのてたいした量の文献を読みこなしたわけではないが、たまたま読んだ発達心理学者であるジャン・ピアジェが書いた「哲学の知恵と幻想」は面白いと感じた。ピアジェは子だくさんの人で（新しいテーマを思いつくと子どもをつくったという噂を聞いた）、自分の子どもたちの成長発達の過程を細かく観察して、子どもの認知発達過程に関する理論を構築した。それまで子どもの発達に関する研究領域は児童心理学と呼称されることが多かったが、ピアジェにより人間の認知能力を発達という視点から研究する発達心理学にまで高められたといっても過言ではない。ピアジェの方法はきわめて臨床的で、子どもの観察や子どもとのやり取りを通して認知発達を研究した。データを一定数収集して統計的な分析を行う今日の研究スタイルからみればエビデンスレベルが低いと言わざるをえない。しかし、ピアジェ自身は自分が科学者だという確固たる自己認識をもっており、科学的真理を追求していくことに価値を置いていた。ヤスパースのように真理には哲学的真理と科学的真理の二種類があるという議論は到底容認できず、哲学は「知恵」を提供できても真理を追究するものではないという立場を貫いていた。「哲学の知恵と幻想」の中で、ピアジェはヤスパースの名前をあげてこっぴどく批判していた。

私はピアジェを通して発達心理学に関心を持ち、さらに当時隆盛になりつつ

あった臨床心理学に関心を広げた。ヤスパース自身、哲学は科学の営みが挫折するところから始まると語っている。科学研究を徹底的に推し進めて行って、それでも到達できない地点から哲学が始まる。だとすれば、まず科学研究をやらないと始まらないではないか、と若い私は考えた。何ら科学的な研究をやらず、いきなり哲学を勉強するのは間違いなのではないかという思いにとらわれた。

もっとも哲学の大学院に進まなかったのは、もう一つ大きな理由があった。当時、私の狭い下宿の部屋でヘーゲルの「精神現象学」の輪読会をしていたが、その中に極めて優秀な友人がいた。この友人は人間的にも自分より優れているように感じられ、こういう人が哲学者になればよいので、自分ももっと実際的なことをやろうと考えたのである。そこで、哲学を自分の専門にするのはやめにして心理学を勉強しようと考えて方向転換し、臨床心理学を専攻できる教育学研究科の大学院に進んだ。臨床心理学を勉強して心理療法の専門家になれば、さしあたり自分の眼前にいる人の役には立てそうだし、ピアジェのような臨床研究は自分の性にあっているようにも感じていた。

余談だが、数年前、哲学科で一年後輩だった友人と話していて意外な事実を知った。その後輩は古典語も含めた数か国語を自在に操る秀才なのだが、私が到底太刀打ちできないと感じたのと同じ人物に接して、大学院まで進んだにも関わらず研究者の道を選ばず他の進路を選択したのだという。図抜けた人は本人が意図しないところで他人の人生に影響を与えるのだろう。

話を紀要に戻す。大学院の修士1年生の時、臨床心理学の先輩から教育相談室紀要というのがあって何でもいいから書かないかといわれた。そこで、哲学科での卒業論文を少し焼き直して書きあげたのが「心理療法と〈現象学〉－カール・ヤスパースに即して」だった。

ヤスパースは先に述べたように精神医学から哲学に転じたのだが、まだ医学の領域にいた30歳の時に「精神病理学総論」の第1版を書いている。これは日本では「精神病理学原論」として翻訳されみずす書房から出版されている。のちに第5版が「精神病理学総論」として翻訳され岩波書店から出された。「精神病理学総論」は精神医学の世界では高く評価されている著作で、精神病理学にはじめて方法論的な基礎を導入したとされている。こういう業績を30歳で残すというのは並大抵のことではない。しかも彼は子どものときから気管支拡張症に悩まされ続けており、実地の診療をほとんどやっていないのである（やっていないから書けたともいえるだろう）。彼は精神病理を記述的現象学に基づいて記載し、

(4)

それを「了解可能性」によって分類した。幻聴や一次妄想などは感情移入的に了解することはできないのであって（了解不能であって）、身体的な要因によって「説明」するしかないと唱えた。

この「了解」と「説明」の区別は臨床心理学の世界ではたいそう評判が悪かった。当時臨床心理学を牽引していた河合隼雄氏（京都大学）がヤスパースの現象学を名指しでとりあげ、了解可能性に限界を引くことを厳しく批判していた。私が所属していた東京大学のグループも同様だった。考えてみれば、まだまだ新しい分野だった臨床心理学が自分の守備範囲を拡大していくために当然の主張だろうし、ある意味でそれぐらいの心意気がないとカウンセラーは務まらないのかもしれなかった（まだ臨床心理士という資格はなかった）。私はこうした齟齬は現象学という言葉の多義性に起因しており、ヤスパースの記述的現象学が現象学的還元を中心概念とするフッサール流の現象学と本質的に異なることを述べた。

ヤスパースの了解可能性に関する議論は主として統合失調症を対象として行われている。当時の私は患者さんに会ったことはほとんどなかったのだが、どのような病気であるにせよ他人の気持ちや考えをすべて了解できるというのは「幻想」ではないか感じていた。また、臨床心理学を専攻する教員や大学院生たちが医学に批判的であることにも違和感を覚えていた。たとえば自閉症（自閉性スペクトラム障害）の子どもが相談にくると、心因論の立場から母子関係によって自閉症になっていくという前提で相談（治療）と事例検討が行われていた。私にはこれはまさにヤスパースのいう「かの如き了解」であって、限界を認めようとしない傲慢な態度に感じられた。1980年代のことであり、すでに自閉症の認知機能障害説が主流になりつつあった時代である。その後、私は臨床心理学の世界への不適応が明確になり医学の世界に転向を余儀なくされるのだが、振り返れば修士1年の時にすでに当時の雰囲気違和感を覚え、ヤスパースを引用しつつ「科学の重要性」「了解の限界」などを論じたかったのだと思う。

かくして20歳代半ばの私は教育相談室紀要にこういう論文を書いた。こんな代物を掲載してくれる学術雑誌はあろうはずがなく、当時の私には載せてくれと頼める商業誌の編集者の知人もいなかった。だから紀要は本当に大切な場であった。あれからおよそ40年、その間に数人だが、私が書いた論文を読んだといって感想を話してくれた人がいた。また、今から10年ぐらい前だろうか、東京大学で臨床心理学を勉強している大学院生を前に経験談を語る機会を与えられ、この紀要を読み直したりもした。活字になっていなければ、こういう作業もできな

かったに相違ない。

学術雑誌は一定の形式と内容を持たなければ受理してくれない。エビデンスレベルを高めるには対象を限定し方法を精緻化しなくてはいけない。これは当然のことだが、研究者には自由な発想が必要であって雑文を書く機会があってもいい。インパクトファクターがつかない論文・原稿を自由に書くことで自分の考えを明確にしていくことができるかもしれない。少なくとも 20 代の私にとって、東京大学教育相談室紀要に「心理療法と〈現象学〉」を書いたことは意義があった。

新しい発想、自由で勝手な意見を展開する場として紀要は貴重な場である。とはいえ最低限の決まりは必要で、あまりに作法を弁えていない論文は許容できない。そのため基礎科学紀要では編集委員会を作り、必要に応じて外部査読をお願いすることで一定の水準を維持することに努めてきた。このシステムを作るにあたっては多くの先生方のご尽力があった。

基礎科学紀要が今後も発行され続けることを願っている。

(受付日 令和元年 10 月 17 日)

(受理日 令和 2 年 1 月 20 日)

(6)